学べるゲラ

第80回 箱根駅伝往路・青山学院大

※2025年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

第101回東京箱根間往復大学駅伝競争（箱根駅伝）は2025年1月2日、東京・大手町―神奈川・箱根町の往路5区間107・5キロに関東の20校とオープン参加の関東学生連合を加えた21チームが参加して行われ、青山学院大が5時間20分1秒で優勝した。2年連続7度目の往路優勝。

前半は想定通りに進まなかった青山学院大だが、山上り5区で若林宏樹が鮮やかな逆転劇を演じ、1分47秒の貯金を作った。「山の神」を文字った「若の神」の異名を持つ若林の快走に、原晋監督は「若の神、ここに降臨という形で頑張ってくれた」と相合を崩した。

1区からトップを走っきた中央大と45秒差の2位でたすきを受けた若林は山上りのスペシャリストだ。これまで5区を2回走り、ともに区間上位の走りでチームを往路優勝にもたらした。コースも熟知しており、10キロ手前で中央大・園木大斗を捉えると「相手も疲れているはず」と脇目も降らず一気に抜き去った。

繰り返し手を突き上げながらフィニッシュした若林は区間新記録も樹立し、「最高に気持ちよかった」と満面の笑顔を浮かべた。

先行逃げ切りを図りたかったが、前半は思い通りに進まなかった。

1区で宇田川瞬也が1分44秒差の10位と出遅れ、3区で「3本柱」の一人の鶴川正也がトップの中央大との差を1分35秒まで広げられた。

流れを変えたのが、４区のエース・太田蒼生だった。区間賞の快走で中央大との差を50秒まで詰め、５区の逆転劇につなげた。想定外の状況でも選手たちは底力を発揮し、原監督は「駅伝とはトータルで戦うもの」と胸を張った。

青山学院大は初めて総合優勝した15年大会から18年大会まで４連覇を達成した。それ以降も３回の総合優勝を果たしたが、連覇は一度もできなかった。今大会は、前回の優勝メンバーが６人残り、戦力が充実していた。

原監督は「６区で（さらに）30秒以上離し、ピクニックランで７、８、９、10と（フィニッシュに）帰りたい」と話し、久々の連覇へ自信をみなぎらせた。